

◆聴覚障害のある子どものためのプログラミング教室

聴覚障がいのある子どもたちを対象とした UBS のプログラミング教室は、2014 年に UBS テクノロジー部のひとりのプログラマー Francois Mauriti によって発案され、今年で 6 年目となります。プログラミングのスキルを持つ社員が中心となり、子どもたちにプログラミングの基礎を教えるプログラムです。

デジタルな世界では聴覚に障がいがあっても、健常者と同じようにコミュニケーションをとることが可能であるということ、そして、デジタルの知識を提供することは子どもたちのスキルアップに繋がるという考えは、テクノロジー部長 Tony Higgins および社員の共通意識であり、年々このプログラミング教室にかかわる社員も増えてきました。

教室は約 2 か月の間、2 週間おきの 3 回シリーズで行われ、平日の放課後に子どもたちが UBS のオフィスで 2 時間訪問します。使用する PC は会社のリソースの中で空いているものを社員が集め、一時的に教室向けの PC 設定を行ったものを使用しています。



◆多様な言語を使う社員たちによる企画と運営

UBS のテクノロジー部には計 70 名の社員が所属していますが、今年は教室での先生（サポート）役に 14 名、教室で使う事前 PC セットアップに 13 名、計 27 名の社員が参加をしました。平日夕方オフィスでの開催のため社員にとっても参加しやすく、6 年間に延べ 50 名以上の社員が参加をしました。今年は聴覚障がいの教育支援を行っている NPO 法人 大塚クラブに生徒の募集をお願いし、現場のニーズをうかがった上で、小学校 3 年生から 6 年生を募集する事になりました。

スタート時よりカリキュラムや教材はテクノロジーの社員が作っていましたが、特に今年は募集する子どもが小学校低学年からとなり、対象年齢が低くなったので、社員は就業時間の合間を縫って、4 か月前より打ち合わせを積み重ねて計画を練りました。まず、テクノロジー部の社員（7 名）、聴覚障がいがある社員 2 名（UBS の他部署）、社内で手話教室を企画している社員 1 名が集まり最適なカリキュラムについて相談し、生徒募集のチラシを作りました。

弊社は多国籍の社員が多いため、話し合いは日本語・英語・手話で行われました。

そして最終的に Scratch というプログラミング言語を教材に選びました。Scratch は 2020 年より公立小学校のプログラミング教育で使われるアプリケーションです。

◆子どもたちのエンパワメント

昨年までの間に、『UBS プログラミング教室』を通して約 30 名の中学生・高校生の聴覚障がいがある子どもたちと 5 名の外国にルーツを持つ大学生が JavaScript プログラミング言語を学びました。JavaScript は企業のシステム、スマートフォンのアプリ、Web サービスなど社会の色々なところで利用されています。現代は様々なものがデジタル化されているので、どのようなプログラミングによって成り立っているのかを理解することは非常に重要です。

今年の教室に参加した 13 名の聴覚障がいのある小学生は、Scratch を通してプログラミングの基礎概念を学び、ゲームを作成することが出来るようになりました。プログラミングの概念を理解出来たことは実用的なスキルとなり、教室の最後に各自の作品を自分で説明し、発表することで、プレゼンテーションのスキルアップや自信にも繋がりました。いままでの教育では学ぶ機会がなかったプログラミング言語を習得したことは子どもたちにとってひとつの成功体験となっていると思います。この教室を機にプログラミングのことが好きになった子どもはさらにプログラミングを勉強し、テクノロジー関連の仕事に就くことを目指したり、将来を切り開くきっかけにもなっています。

